

1 主題構成表

主題名 「あきらめないでやりぬく心」 (小学校・中学年)

資料名 「うちかつ心—中村 久子」

■ 内容項目 1-(2)
自分でやろうと決めたことは粘り強くやり遂げる。

■ 価値の分析
・児童が自立し、よりよく生きていくには、自分がやらなければならないことはしっかりとやり抜くことが大切である。そこには、何事にも粘り強く取り組み、努力し続ける忍耐力も求められる。
・よりよい自己を実現しようとする向上心と結び付いてこそ、前向きな自己の生き方が自覚されてくる。
・この段階においては、自分がやらなければならないことだけではなく、自主性を発揮し、自分でやろうと決めたことに対しても積極的に取り組み、粘り強くやり遂げる精神を育てることが大切になる。

■ 内容項目から見た児童の実態
(意識)
・係活動や学習等では、自分がやらなければならないことを最後までやり抜こうとする意識が強い。また、教師や保護者等にほめられることで、努力を続けようとする気持ちがより強くなる。
・よりよい自分を目指して生活や学習の目標を立て、その達成に向けて努力したいという気持ちがある。一方で、自分が決めたことでも、困難な場面に直面すると、途中であきらめて投げ出したい気持ちになる。
(要因)
・面倒なことや難しいことがあってもあきらめずに最後までやり抜くことで、達成感や成就感を味わった経験が少ない。
・自分が決めたことを最後までやり抜くことが、自分自身の成長や、願いの実現につながることに気付いていない。

■ 資料の分析
・本資料では、病気になり、幼くして手足を失った久子が、「友だちと同じことができるようになりたい」という願いをもち、母親から与えられた着物の糸をほどく仕事を、何度もあきらめそうになりながらも、粘り強くやり抜く姿が描かれている。
・どうやっても糸をほどくことができないために、「誰かに頼りたい」「困難から逃げたい」と思う久子の弱さに共感することができる。
・それでも、着物をほどくことを投げ出さず、やると決めたことを粘り強くやり抜こうとする久子の強さに気付くことができる。
・着物の糸をほどき切った久子の気持ちから、難しくても最後までやり切ることで、達成感や成就感を味わえることに気付くことができる。

■ ねらい
困難に直面してもあきらめずに最後までやり抜くことが達成感や成就感につながることに気づき、自分でやろうと決めたことを粘り強くやり遂げようとする心情を育てる。

■ 展開の構想
・思うように糸がほどけない辛さや苦しきから、人に頼ったりあきらめたりしそうになっている久子の思いに共感させる。
・それでも、着物をほどくことをあきらめず、やると決めたことを粘り強くやり抜こうとする久子の強さに気付かせる。
・1枚の着物をほどき終えた久子の気持ちから、辛さや苦しさを乗り越えてやり切ったことで味わえる達成感や成就感に気付かせる。
・自分の生活を振り返ることで、自分でやると決めたことを粘り強くやり遂げようとする心情を高める。

■ 基本発問 (◎中心発問)
○どうやっても糸をほどくことができないでいたとき、久子さんはどんな気持ちだったでしょうか。
◎久子さんはどうしてほどき物をわきの下にはさんだり、口にはさんだりしながら、ほどき方を考え続けたのでしょうか。
○1枚の着物をほどくことができ、「おかあさん、ほれ、ほどいてしまったよ。」と言ったとき、久子さんはどんな気持ちだったでしょうか。
○これまでに、自分がやろうと決めたことを最後までやり抜いたことはありますか。

■ 「わたしたちの道徳」の活用 (授業前 ・ 授業中 ・ 授業後 ・ 活用しない)
(活用の仕方) 帰りの会で、「目標に向かってがんばり続けるひけつ」(P.23)を読み、目標に向かって努力することについて考える。その後、家庭に持ち帰って家族と話し合い、記入する。

2 学習指導過程

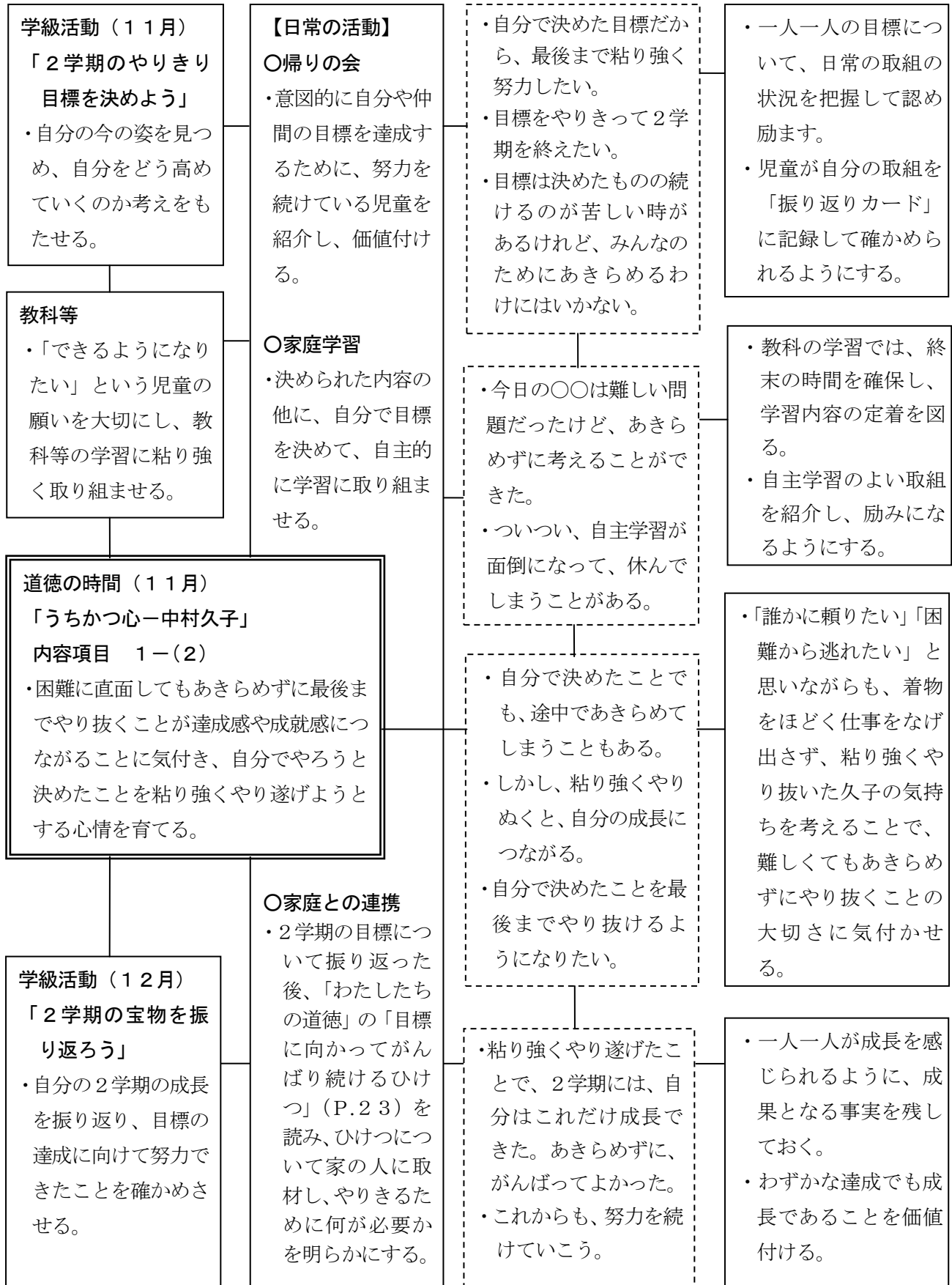
	基本発問と予想される児童の反応	指導・援助
導入	<ul style="list-style-type: none"> ◇資料への興味・関心を高める。 ◇中村久子について説明する。 <ul style="list-style-type: none"> ・岐阜県高山市で生まれた。 ・3才の時、病気で両手、両足を失った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・久子の生涯や当時の時代背景について解説し、資料への興味を高めるとともに、人物への理解を促す。
展開前段階	<ul style="list-style-type: none"> ◇資料提示をし、範読する。 ○感想を交流しましょう。 <ul style="list-style-type: none"> ・手足がなくても、字を書いたり人形をつくったりできるなんて、たくさん努力したからだと思う。 ・着物がうまくほどけなくても、あきらめずに続けたところが素晴らしいと思う。 ○どうやっても糸をほどくことができないでいたとき、久子さんはどんな気持ちだったのでしょうか。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分ではできないから、お母さんに助けてほしい。 ・こんな体の自分を助けてくれない母は冷たい親だ。 ・自分にはとても無理だから、こんな仕事はやめてしまいたい。 ・友だちと同じことができるようになりたいなんて、最初から無理な願いだった。 ◎久子さんはどうしてほどき物をわきの下にはさんだり、口にはさんだりしながら、ほどき方を考え続けたのでしょうか。 <ul style="list-style-type: none"> ・糸を自分でほどくことができる方法を見付けたい。 ・何とかして、自分でできるようになりたい。 ・ここでやめてしまったら、一生できるようにならない。 ・あきらめたら「友だちと同じことができるようになりたい」という願いは叶えられない。 ○1枚の着物をほどくことができ、「おかあさん、ほれ、ほどいてしまったよ。」と言ったとき、久子さんはどんな気持ちだったのでしょうか。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分で着物がほどけるようになってうれしい。 ・あの時、投げ出さなくてよかった。 ・あきらめずにやり通したからこそ、着物がほどけるようになった。やり遂げてよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物の確認をし、主人公「久子」の気持ちを中心に考えることを確認する。 ・感想交流から、児童が着目した場面を把握して発問につなげる。 ・あらすじをたどりながら、「友達と同じことができるようになりたい」と願いをもった久子の気持ちを押さえる。 ・思うように糸がほどけない辛さや苦しきから、人に頼ったりあきらめたりしそうになっている久子の思いに共感させる。 ・久子の弱さを取り上げ、あきらめそうになることはだれにでもあることを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>【深めの発問】</p> <p>★上手くほどけないから、たびたびなげ出そうと思っていたのに、どうしてやめなかったのか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・それでも、着物をほどくのをあきらめず、目標の達成に向けて粘り強くやり抜こうとする久子の強さに気付かせる。
展開後段階	<ul style="list-style-type: none"> ○これまでに、自分がやろうと決めたことを最後までやり抜いたことはありますか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ピアノが上手に弾けるようになりたいから、毎日練習を頑張った。目標にしていた曲が弾けたときはうれしくて、休まずに練習してよかったと思った。 ・逆上がりができるようになりたいと、毎日毎日鉄棒で練習をした。発表会の日、やっとできて本当にうれしかった。あきらめずに練習してよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分でやろうと決めたことは粘り強くやり遂げる」ことについて、これまでの自分の経験や考えを振り返る。 ・仲間の経験や思いを聞かせることで、今後の自分の生き方を見つめさせる。
終末	<ul style="list-style-type: none"> ◇教師の説話をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・児童が目標具現に向けて、あきらめずに取り組んでいる姿を紹介し、価値付ける。 	<p><変容の見届け></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「あきらめずに最後までやり抜くと、自分もやり遂げた満足感を得ることができる。」「目標の実現に向けてあきらめることなく、面倒になっても最後まで続けられるようになりたいな。」など、粘り強くやり遂げようとする思いをもっている。

3 道徳の時間（本時）と他の教育活動との関連

<場の内容・ねらい>

<児童の意識>

<指導・援助>



うちかつ心——中村 久子

なかむら ひさこ

おひとつ、おひとつ、おっさらえ。

※1 石でできたチヨーク

のようなもの

おひとつ、おひとつ、おっさらえ。

※2 石でできた板で黒板
のようなもの

久子の家に、近所の友だちが遊びに来て、お手玉遊びをしています。

久子は、友だちのきょうな手つきを見ながら、お手玉の歌を歌っています。

「わたしも、お手玉遊びがしたいなあ。」

久子には、お手玉をつかんだり、ほうり上げたりする手がないのです。

久子が、もうすぐ三才になるうとする明治三十三年（一九〇〇年）の秋に、

久子の手足は急にむらさき色になり、ほうっておくと、うんでくさってしま
う「とつぱつせいだつそ」という病気になったのです。それで、手術をして、
りょうてりょうあし
両手両足を切りとってしまったのです。

学校に行けない久子は、針仕事をするおばさんのそばで字をならいました。

肩から少し出ただけの短いうでにほうたいをまき、そこに石ぼく※₁をはさ
かた
んで、小さな石板※₂に書きました。書きたびに、石ぼくを落としたりしない
せきばん
ように気をつけなければなりませんでした。

久子が十才になったころのことです。

母は、着物などの衣類を両手いっぱいにかかえてきて、久子の前におくと、
きもの
いるい
りょうて
「かあさんだけでは、とてもほどこききれん。久子や、少しでもいいから手助け
てだす
しておくれ。」

と言いました。

久子は、山ほどつまれた衣類を、どのようにほどこうかと、ながめるばかり

でした。

わきの下に、ほどこき物ものをはさんで、なんとか、口にくわえたはさみで糸を切ろうとするのですが、そでやえりのところになると、とくにじょうぶにぬってあるので、かんたんにはほどこけません。とうとう久子は、

「おかあさん、ここだけ切って。」

とたのみました。

しかし、母は、

「もう少し、がんばってごらん。」

と言うだけでした。

久子は、どうやっても糸をほどこくことができない自分が、くやしくなりました。また、こんな体の自分をたす助けてくれない母を、つめたい親だとも思いました。

それでも、久子は、また、ほどこき物ものをわきの下にはさんだり、口にはさみをくわえたりしながら、ほどこき方を考えました。口には血ちがにじみ、食べ物ものを口に入れるとひりひりといったみました。たびたびなげ出そうと思いましたが。それでも、なんど何度も、なんど何度もはさみをすべらせたり、おとしたりして、やっと、糸のぬいめを少しずつ切っていくことがはじできました。

そして、とうとう、一まいの着物きものをほどこくことができました。

「おかあさん、ほれ、ほどいてしまったよ。」

と言う久子の元気な声に、母は、目になみだをうかべて、なんど何度もなんど何度も大きくうなずくのでした。

それからは、口に針はりをくわえて着物きものをぬう練習れんしゅうもしました。着物きものの糸をほどこより、もつともつと苦勞くろうをして、何年もかかりながら、やっと、思うような着物きものがぬえるようになりました。



こうして、久子は、ふでで字を書くことも、人形をつくることも、料理する^{りょうり}ことも、たいていのことはできるようになりました。

内容項目 一―(二)

出典 岐阜県教育委員会 きょうどのどとうとく「うちかつ心」

(昭和六十一年七月)